

第2章 郡上市の維持及び向上すべき歴史的風致

郡上市は、地形を広域的にみると、北部には高鷲町のひるがの高原や上野高原、明宝のめいほう高原の高原地帯が広がる。市内には、南北に流れる長良川、郡上市八幡町の市街地（以降は、「郡上八幡市街地」と記載）を東西に流れる長良川支流の吉田川と小駄良川があり、吉田川の上流には支流である寒水川や気良川などがある。これ以外にも、飛騨川へつながる和良川、九頭竜川へつながる石徹白川などの一級河川が数多くある。郡上市の主要河川である長良川は、高鷲町の「かます谷」から始まり、水量を増しながら白鳥町、大和町、八幡町、美並町、そして岐阜市を経て伊勢湾へと注ぐ。加えて、歴史的には近代以前より美濃の北部に位置していることから、古くから飛騨、越前、加賀へ行くには比較的近いと、長良川に沿って北上し、これらへの通じる街道として利用されてきた。

歴史的にみても、古代から中世にかけて一大勢力を築いた白山信仰は、白鳥北部地域を中心に展開してきた。先に記載した長良川に沿った道は、参拝する美濃馬場の街道としても役割をもっている一方で、市内は急峻な山々が連なっているため、川沿いの道に限らず、山々を行き来する人々もいた。特に信仰の面からみて、白山信仰系の白尾山信仰、虚空蔵菩薩信仰である高賀山信仰は、山の道を通して広がったのである。

信仰の面に限らず、中世には鷲見氏や武家歌人として有名な郡上東氏が登場し、郡上の歴史・文化の礎として展開していった。近世初期に形成された山と川に囲まれた城下町は、現代の郡上八幡市街地にも受け継がれ、水とともに生きるという独自の生活様式が形成されるようになった。また、近世後期には各地で残されている祭礼や盆踊り等が、記録等で確認できるようになり、いかに人々の生活の中に密接に関連していたかを垣間見ることができる。

明治維新以降は、郡上郡内がさまざまな変遷をたどりながら、7町村で個性豊かな地域づくりを行い、特色ある郡上郡を創出していった。特に、昭和戦前期から行われて開拓事業は、今日の高鷲地域の産業の基盤になっていくのである。平成16年（2004）には「郡上はひとつ」を合言葉として7町村が合併し、岐阜県で19番目の市として郡上市が誕生した。

さて、郡上市として歩みを続けている一方で、これまでの各地域に展開していった歴史的に価値の高い建造物、その周辺に展開する生活圏、そして、各地の歴史・文化を反映した人々の活動は、今日でも継続している。まさに「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」で位置付ける「歴史的風致」を形成している。本市における維持・向上すべき歴史的風致は、次頁以降の通りである。

